

<目次>

- ◇巻頭言「人を見て法を説け」
伊勢市教育委員会教育委員 鍋島 健二
- ◇「学び続けること」
伊勢市教育研究所長 濱口 憲子
- ◇平成30年度開催予定教職員研修講座等
- ◇研究概要報告Ⅰ「不登校の子どもたちの未来支援を考える」
伊勢市教育研究所研修員 東端 志野
- ◇研究概要報告Ⅱ「中一ギャップ解消のための算数授業の試み」
伊勢市教育研究所研修員 中山 雅貴
- ◇社会科副読本「わたしたちの伊勢市」刊行に際して

巻頭言 「人を見て法を説け」

伊勢市教育委員会教育委員 鍋島 健二

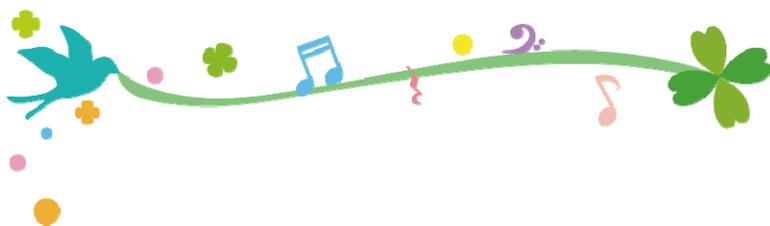
平成29年12月23日より教育委員をさせていただくこととなりました。伊勢市の「教育」に携われる機会をいただき、改めて「教育」について考える良い機会になると思っております。

私自身、親であり一会社の管理職です。子育てにおいて、会社での部下との関係について、「教育」の観点から、「教え、育てる」立場にあるかと思いますが、親として、また管理職として、子どもや部下と接する中で「教えられ、自らが育てられている」と感じる事が多くあります。初めから親や管理職になれるわけではありませんから。

子どもや部下と接する時に、「人を見て法を説け」のことわざにもあるように、子どもや部下の性格「個性」を知るように努力します。教え方や指示・指導の際に、相手の「個性」に合った方法を選択し行動するためです。ただ、簡単にはいかないことが普通です。試行錯誤しながら良い方法を見つけていきます。子どもの「個性」に合わせた教え方や叱り方を変えると、周りから誤解されることもあります。例えば、一人の子には言葉厳しく、もう一人の子には丁寧にこと細かく説明し、教えたり叱ったりする場合があります。前述は厳しく、後述は優しく見えるため、周りからは公平ではないと言われることもあります。子どもたちがどうすれば理解できるかを考えての結果なので、誤解を招いても仕方ないと思うこともあります。

ものづくりの世界でも「三現主義」があります。「現場・現物・現実」の三つの「現」です。問題が発生した場合に、机上でどれだけ議論し推測して対策を出しても、問題解決につなげることは難しいです。「現場」で、「その物（現物）」に、「何が起きているのか（現実）」がより明確にならないと真の原因にはたどり着きません。真の原因をつかむことで、効果のある解決策を導き出すことができるのです。「人を見て法を説け」も同じで、相手の「個性」を知ることで、相手にとっての最善策・方法を探し求められると思っています。

「人」は会社を支えるものであり、発展のために最も重要です。特に自分の仕事や会社に誇りを持つ「人」こそ財産「人財」だと思います。その将来を担う子どもたちは宝です。伊勢市にとっても子どもたちは宝です。その子どもたちを育てるための「教育」に携わる教育委員会の一委員として役割を果たしていきたいと思っています。精一杯努めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。





学び続けること

伊勢市教育研究所所長 濱口 憲子

毎年、ソメイヨシノの開花の便りが届き始めると初任の頃を思い出します。教師になったばかりの春、やる気に燃えながらも不安が入り混じった気持ちで、職員室の窓から見える満開の桜を眺めていた場面が鮮明によみがえります。

赴任校は茶畑に囲まれた多気郡の小規模中学校でした。担当したのは専門教科の国語と臨時免許による保健体育です。いざ授業が始まると、3年生女子の指導に難儀しました。どんな指示を出しても知らん顔で、聞いてくれない生徒がいました。「えらそうに、大人ぶってたらいかんよ!」と注意すると、「あんたもやんか!」と小競り合いになり、ついには、生徒と一緒に校長室で指導を受けるというありさまでした。

楽しみは放課後のソフトボール部の指導でした。「先生、ノック上手いなあ。」「先生、肩強いなあ。」と生徒たちに声をかけられ、得意になっていたものです。放課後が近付くとワクワクしました。

今思えば、指導とは言い難い、生徒たちと一緒に汗をかくのが楽しくて仕方がないという時間だったように思います。その頃は、教師としての自分の関わりが、生徒たちの人生に何かしらの影響を与えているなどと考えもしていませんでした。ただ夢中でした。

少し考え方が変わったのは、結婚して子どもを授かったときでした。「命」ということを強く意識し始めたのです。養護教諭に、『命』の授業をするなら、今やよ。」と背中を押され、折しも当時来日していたマザーテレサの生き様にも深い感銘を受けて、「命」の授業をたくさん実践しました。そして、後にそのクラスの生徒40名のうち、8名が医療系の仕事に就いてくれたという嬉しい経験をしました。

私たち教師は、毎日、子どもたちに何かしらの出会い(出合い)をしかけているのだと思います。目の前の子どもたちに、どのタイミングで、どのような題材を提示するのか、どのような声をかけ

るのかをよく吟味する必要があります。とても繊細で責任の重い役割ですが、それこそが教師の醍醐味でもあります。

三重県教育ビジョンに「毎日が分岐点」という印象的な言葉が記されています。大好きな言葉です。私たち教師が子どもたちの人生に何かの影響を及ぼしているということを再確認させてくれた言葉でもあります。

私たちは教壇に立つとき、目の前の子どもたちに自分自身の生き方や学びの姿勢、人への対し方、それらすべてをさらけ出しています。ふり返ると、時に思いをぶつけ過ぎて失敗もしました。

それでも、教材研究や発問の吟味、思いのたけを記した学級通信、授業で子どもたちに見せようと取り寄せた書籍…それらには知らず知らずのうちにまごころを込めてきました。

こうして発信した何かが子どもたちの琴線にふれ、「あっ、そうか!」「おもしろそう!」と、新たな「気付き」につながったとき、そこに子どもたちの人生の小さな分岐点ができます。大人になった教え子に再会したときに、思わぬ言葉を覚えてくれていたことに、はっとすることがあります。だからこそ、教師は謙虚さを忘れずに学び続けなければならないのです。

3月に教育支援センターNESTを巣立っていった子どもたちの多くが、「ここでみんなに出会えて良かった。」と涙ながらに語ってくれました。子どもたちが自分の意思でNESTに通級することを選んだこと、それこそが人生の分岐点だったと気付いていたのです。そして、仲間との出会いの意味や職員のみごころをしっかりと受け止めてくれていました。その場面に立ち会えたことを幸せに思います。

今改めて、教師という職責の重さと尊さを痛感し、子どもたちにとって魅力的で期待感いっぱいの大人でありたいと思います。そのためにも、子どもたちや自身の分岐点をタイムリーにとらえながら、学び続けたいと考えます。



平成30年度開催予定 教職員研修講座等

教育研究所では平成30年度の教職員研修講座等を下記のとおり予定しています。

今年度人気が高く、「ぜひ、もう一度！」というリクエストが多かった講座をはじめとして、今日の教育課題に関する講座や話題の講師の講座まで、魅力的な講座ばかりです。

ぜひ、学びの時間を共有しましょう！詳細につきましては、新年度改めてお知らせします。

(1) 教育講演会（保護者・市民にも案内）

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属等 (H29年度)	会場 (予定)	備考
1	7/25(水)14:30~	人権教育講演会	ドリアン助川	作家・ミュージシャン	いせトピア	人権政策課との共催
2	8/23(木)14:00~	特別支援教育講演会	志村 浩二	浜松学院大学准教授	いせトピア	小中学校・幼稚園の特別支援教育コーディネーター及び学習支援員研修会を兼ねる

(2) 教職員研修講座

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属等 (H29年度)	会場 (予定)	備考
3	7/30(月)13:30~	学校マネジメント	妹尾 昌俊	教育研究者	ハートプラザみその	
4	7/31(火)9:00~	授業づくり(国語)	白石 範孝	明星大学常勤教授	未定	示範授業と講演 平成29年度の大人気講座
5	8/2(木)9:15~	子ども理解	岩宮 恵子	島根大学教授	ハートプラザみその	平成29年度の大人気講座
6	8/7(火)13:30~	授業づくり(外国語活動)	田尻 悟郎	関西大学教授	ハートプラザみその	模擬授業形式講演
7	8/8(水)13:30~	授業づくり(道徳)	柳沼 良太	岐阜大学准教授	ハートプラザみその	
8	8/9(木)9:00~	特別支援教育	中尾 繁樹	関西国際大学教授	未定	小中学校・幼稚園の特別支援教育コーディネーター及び学習支援員研修会を兼ねる
9	夏季休業中	ICTスキルアップ講座	情報教育研究会	伊勢市内小中学校教員	未定	プログラミング教育を含む複数回開催
10	夏季休業中	自己啓発	篠原 誠	電通クリエイティブディレクター	未定	津市出身。三太郎、トライ等のCMディレクター
11	未定	若手教員の学びを支える研修講座	未定	未定	教育研究所、その他	年間4回開催予定
12	随時	若手教員の学びを支える研修講座 (教育全般)	指導主事等	伊勢市教育委員会、その他	教育研究所、その他	不定期 (対象者の希望に合わせて開催)

(3) 乳幼児教育研修講座

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属	会場 (予定)	備考
13	6/16(土)14:00~	乳幼児教育	神川 康子	富山大学副学長	ハートプラザみその	公立幼稚園協会研修会を兼ねる

(4) カウンセリングマインド向上研修

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属	会場	備考
14	未定	カウンセリングマインド向上研修	大学教員	鈴鹿医療科学大学	対象校、その他	校内研修 (対象校12校) カウンセリングリーダー研修 (4回)

(5) 「不登校対策ハーモニーハート総合推進事業」に係る研修会

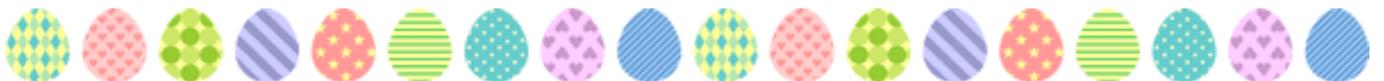
番号	開催日	講座名	内容	講師・報告者等	会場	備考
15	未定	不登校対策に係る研修会	未定	未定	未定	年間2回開催予定

(6) 「スクールイノベーション総合推進事業」に係る研修会

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属	会場	備考
16	未定	ICTを活用した授業改善研究	大学教員	皇學館大学	研究委託校	皇學館大学との連携によるICTを活用した授業改善研究
17	未定	ICT機器活用向上講座	ICTアドバイザー ICT支援員	教育研究所	希望校	
18	未定	情報モラル講座	ICTアドバイザー 情報教育担当指導主事	教育研究所	希望校	平成29年度開催実績53回

(7) 教育研究プロジェクト (研究報告会)

番号	開催日	講座名	講師	講師の所属	会場	備考
19	未定	社会科副読本活用に 係る実践研究	未定	未定	研究委託校	
20	未定	今日的課題研究	未定	未定	研究委託校	教育研究所研修員の研究
21	未定	幼稚園教育に係る 実践研究	未定	未定	未定	市立幼稚園3園での協働研究



研究概要報告Ⅰ 「不登校の子どもたちの未来支援を考える」

伊勢市教育研究所研修員 東端 志野



1 はじめに

教育支援センターNEST で不登校の子どもたちと一緒に過ごしてきた。その中で関わった子どもたちが巣立ち、自分の歩む道を見つけて頑張っている姿を見て、支援する者として、教師として、何をすべきなのかを改めて考えることにした。

今年度初めての試みとして、先に進んだ先輩の声を聞く機会を設けた。通級している子どもたちが、「自分をあきらめたくないし、できるかもしれない。」と少しでも感じる事ができたら、力がわいてくるのではないかと考えた。

2 不登校からの脱却をめざして

(1) 「あの時の出会いが僕を変えた」 ～卒業生Aとの出会い～

①Aの姿

通級当初から、誰に対しても優しく、他の通級生と共に穏やかに過ごしていたが、自分の主張はなかなか言えないところがあった。学習に関してはまじめな姿勢で取り組んでいた。NESTでは笑顔も出るようになったが、学校に行くとなると体調を崩し、思うようにはいかなかった。進路決定の時期が近づくにつれ、学校へ行かなくてはという気持ちが強くなり、指導員が支援をして登校する日もあった。学校の進路説明会に参加し、E高校の話にひかれて見学に行った。そのときのF先生の言葉により気持ちを固めた。

高校入学後、一時登校しづらくなったが、F先生や友だちの誘いがあり、再び登校できるようになった。またF先生に誘われ野球部に入部。慣れない練習に耐え、3年生ではキャプテンになり、高校野球三重県予選に出場した。強豪校と対戦し、最後まで頑張る姿が新聞に掲載されたこともあった。さらに、文科省の留学プログラムの代表に選出され、ベトナムを訪れ、ホームステイをしながら日本語学校のアシスタントとして日本語や日本文化を教える貴重な経験をした。

Aの成長を聞き、通級生に話をしてもらうことを提案。「僕でよかったら。」と快く引き受けてくれた。

②『ようこそ先輩！1』

2017年11月15日 午後1時～(通級生9人参加)

不登校だった頃の私は、目の前の問題ばかり考えてそれにおびえて目を背けることしかできなかったが、不登校を完全に克服してからは、将来のために今自分が何をすべきか少しずつ明確にわかるようになり、自分の世界が何倍にも広がっていくように感じた。不登校を克服したことで、大人になるためのスタートラインに初めて立てたのだと感じた。



今の私があるのは、あの時に1歩踏み出して学校へ行ったからだと思う。私が大事だと感じたのは、ありきたりだが「一瞬でも勇気を出してみる。」何も深く考える必要はなく、行ってしまえばその流れに身を任せれば大丈夫。いつの間にか自分がそれになじんでいる。例えどれだけ小さな一歩だとしても、自分が成長したことに変わりはないからそれは誇ってもいい。今まで自分ができなかったことをできるようになっていくことが大事。それを積み重ねていけば不登校は克服できる。(一部抜粋)

③考察

緊張しながらも自分の言葉で一生懸命話をしてくれた姿に成長を感じた時間だった。通級生も興味をもって聞いていた。帰り際に通級生のGが「いい話でしたよね。」と言うので「Gも卒業したら来てくれる？」と言うと「うん。」と言って帰っていく場面があった。こんなふうに今、学校へ行けなくても変わることができる、夢を持つことができるということを少しでも感じ、これから成長する時のモデルとして頭の片隅に残ってくれとよいと感じた。

さらに、2018年2月21日には『ようこそ先輩！2』を開催した。友人関係に悩み、自分に自信が持てなかったB子が、通信制高校に通いながら好きな読書やアルバイト通して新しい世界を見つけ、この春から自分の目標に向かって進むことになったという話をしてくれた。

(2) 「不登校になったことは後悔していない」 ～通級生Cとの出会い～

① Cの姿

母の期待やプレッシャーを抱え、「自分は自分らしくいたい」と思っているのに、相手の目を気にしたり相手に合わせたりして自分を出せずに苦しんでいた。

②『3年間を振り返って』

中学卒業を前に、3年間を振り返って考えたことを書いた。

不登校になっていなかったら NEST のみんなとも出会っていないし、NEST でしかできない体験があったので不登校になったことは後悔していません。どれだけつらくても楽しくても時間が進むスピードは同じで、それと共に環境も変わっていくから、何となく過ごしていた時間をもう少し大切にしていたらなと思います。

私にとって NEST と学校を両立する生活は当たり前になっていて、高校からは NEST がいないというのはすごく不安だけど、「あの頃に戻りたい。」と思ってももちろん戻ってこないし前に進めないの、学校生活も寮生活も頑張りたいです。(一部抜粋)

③考察

「皆にとって、『学校に行く』というのは当たり前でも、私はそうじゃない。」と言って固まったり、部屋にこもったり苦しんでいた C 子である。タイミングをみて NEST で背中を押したり、学校とも連携したりしてきた。そんなときに出会った先輩たちの声は C 子の心に響き、前に進むきっかけになっていたと考える。

C 子の感想には、「私と同じだと思った。たくさん共感できる部分があった。先輩の話を聞いて、苦しかった思い出や忘れたい思い出ではなく、人と違う経験をしたというのを前提にしている話だと思った。私も苦しかった思い出ではなく、いつか経験に変えられたらいいなと思った。」と書かれていた。同じ思いをした子どもたち同士の言葉は響き合うことが分かる。

3 おわりに

研究を進める中で、改めて「子どもたちは成長する。」「不登校の期間があっても、夢や希望があればまた頑張っていけるし未来に向かって進むことができる。」と強く感じた。だからこそ、通過点である今の時間を子どもたちの未来につな

げるために、きめ細やかなタイミングのよい支援や学校での環境整備や各機関との温かい連携が必要なのである。

一人一人の子どもにはそれぞれの物語がある。家庭の闇を抱えていたり、自我の確立途中の変化に悩んでいたりする。NEST に来る子どもの目は厳しく、大丈夫な大人であるのか、安心できる場所であるのかをいつもチェックしている。だからこそ、安心できる大人として対応し、一緒に進まなければならない。

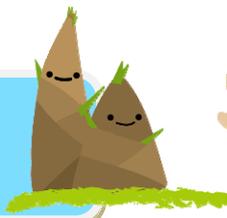
心が安定し、自分のことを心配し、一緒に考えてくれる人がいると感じると、子どもは自分から少しずつ話しだし、素直な表情に変わり、笑顔が増え、行動も活発になってくる。あらゆる体験の中で、あるいは教室で行われる日常活動の中で、新しい自分を発見したり、今までの自分を整理したりすることができ、本来の自分を出していくのである。それには時間がかかり、なかなか最初の一步が踏み出せない。日々関わる者として『ヘルプ』ではなく『サポート』を心がけてきた。経験が少なくどう進んだらいいのかが分からず臆病になっている子どもを、すぐに助けるのではなく、失敗を恐れずにやってみるように促してきた。

進路選択の際も、自分はどうしたいと思っているのかを問いかけ、将来のことをあきらめずに可能性を考えてみるように話した。その上で、相談にのり、できることは支援してきた。やがて子どもたちは葛藤し、『覚悟』を決めていく。その変容の過程で、自分で学校へ行きだしたり先生と交わったり、勉強したり、面接や小論文の練習を始めたりする。最初は1行も自分のことを自分の言葉で表現できなかった子どもたちが、少しずつ自分を振り返り、「今までは学校へ行けなかったけど、高校へ行ったらいろんなことに挑戦して、将来の夢をもってがんばりたい。」と語りだすのである。

前に進みたいと強く思ったときこそ、遠慮なく自分を取り巻く人たちの力を借りてほしいと願う。これからも、自分をあきらめずに、人と関係性を持つ楽しさを子どもたちに伝え、大変な状況に寄り添い、一緒に考えながら、背中を押していくことができればと考える。

研究概要報告Ⅱ 「中一ギャップ解消のための算数授業の試み」

伊勢市教育研究所研修員 中山 雅貴



(図1)

I 研究テーマ設定の理由

中学校では、算数は新教科「数学」へと移行する。数の拡張、文字の導入、証明など、授業内容はより高度なものになる。小学校では具体物を用いたり、図を用いたり、活動を取り入れた授業が多い。しかし、中学校数学では抽象的な思考や形式的な操作を取り入れた授業が中心である。このような算数と数学のちがいにより、数学に対して苦手意識をもつ生徒が増えてくる。学校生活の大半は授業である。授業が分からないという状態は、生徒にとって大きな負担となる。そこで、算数・数学の観点から中1ギャップを解消するため、本テーマを設定した。

II 研究の経過

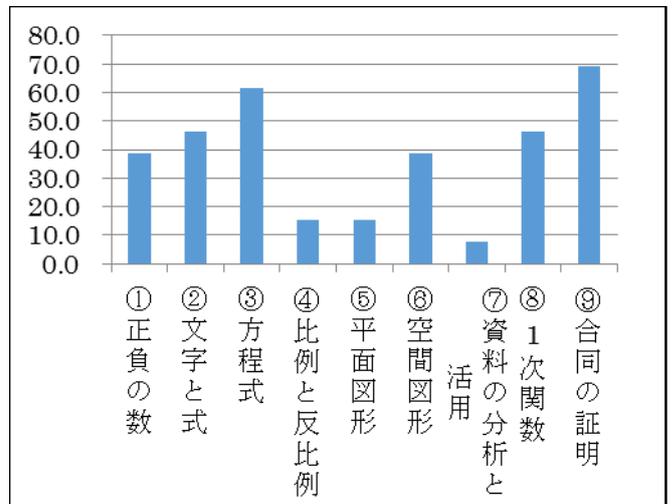
1 中学校数学教員へのアンケート調査

伊勢市教育推進研究会中学校数学部会員を対象にアンケート調査を行った。アンケート内容は、以下の2つである。

- (1) 生徒のつまずきが特に大きいと思われるものを3つ、理由と合わせて記入してください。
- (2) 中学校教師から見て、小学校で身に付けておいてほしい算数の力とはどのようなものがありますか。3つあげてください。

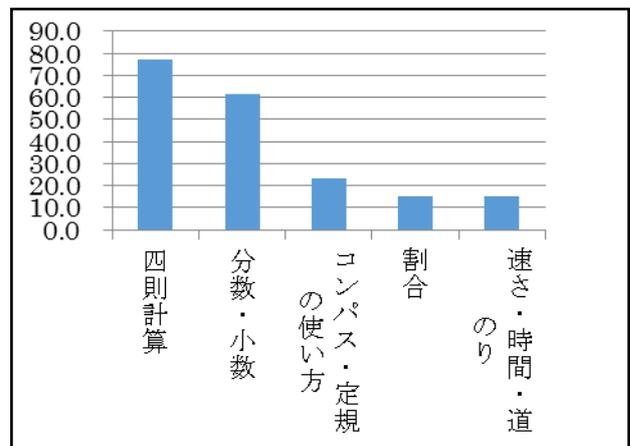
質問(1)に対する結果は(図1)のようになった。7割近い教員が「⑨合同の証明」と回答した。数学では式や計算から1つの答えを求めることが多い。しかし、証明問題では根拠となることばをはっきりさせて筋道立てて文章をかいていかなければならない。ここに生徒は苦手意識をもつのだろう。普段から、自分の言葉で説明したり表現したりする場面をつくるのが大切になってくると改めて感じた。

質問2に対する結果は、(図2)のようになった。ほとんどの教師が九九や四則計算など、基本的な計算力をあげた。中学生になり、数学になっても計算力は欠かせない。素早く正確に計算でき



る力を身に付けさせていかなければならない。割合や速さについてもあげられた。アンケートの間1でも、「③方程式」と答える教師が多かった。方程式の文章題で使われる割合や速さもつまづきの原因の1つであるということが分かる。

(図2)



2 城田小学校での授業実践

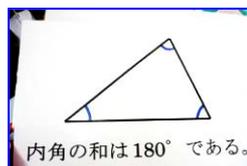
12月から、城田小学校で授業を行ってきた。授業前に実施したアンケートを見ると、中学校の勉強に対する不安が大きいことが分かった。そこで、児童の不安解消の手立てをとり、授業を行った。

基本的な計算の力を身に付けさせるために、毎回の授業のはじめに簡単な計算問題を解かせた。ほとんどの児童が解くスピードが速くなった。記録することにより変化が見え、成果を感じる児童がほとんどであった。余ったプリントをもらって

(図3)

いたり、自分でつくって練習をしたり、楽しんで取り組む児童もいた。計算練習を実施しないときには、「今日もやりたい。」という声も多くあった。しかし、もともとタイムの速い児童については、初回から第7回まであまり速くならず、達成感を感じていないことが感想から見受けられた。今後、児童生徒の実態に応じて、問題のレベルを変えていく必要がある。

図形の性質をA3のプリントに印刷し、ラミネートした。毎回の授業で復習することですぐに定着していった。「黑板にはれる



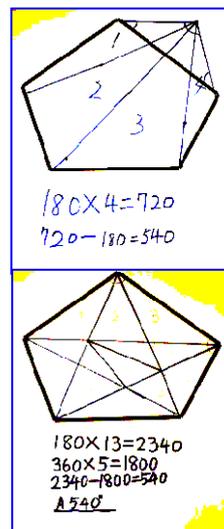
マグネット式の紙を使って授業をしてくれたのがよかった。」「毎回、一直線は 180° などの性質を確認してくれたので、めっちゃ覚えられた。」という感想も多かった。また、黑板に貼ったままにすることで、問題を解くための手掛かりにしたり、説明の場面で活用したりする児童も多くいた。説明となると消極的になってしまう児童が多かったが、説明するための準備をさせることで、少しずつ発表する児童があらわれた。慣れない児童は書いてある式やその理由を読み上げ、説明とした。説明の際、「三角形の内角の和は 180° だから。」「四角形の内角の和は 360° だから。」など、理由を交えて説明する児童も増えてきた。

ペア・グループ活動では、まわりの友だちと相談しながら考えることで安心感をもって取り組むことができた。五角形の内角の和を求める授業(第5時)では、児童はいろいろな方法で内角の和を求めた。個人追究の時間では、ほとんどの児童が1つの頂点から対角線を引き、三角形に分けて



考える方法で求めていた。その後、4人のグループになり考え方を交流した。途中までの考え方もあったが、グループで協力することにより完成させることができた。まわりの友だちが見つけていない方法を探そうと意欲的に取り組んでいた。子どもたちの発想は柔軟で、いろいろな考え方が出された。(図3)は、その一部である。グループで考えることで、止まっていた思考を動かすことができ、協力して新たな方法を考え出すことができた。

図形の性質を見えるように掲示したこと、説明のための準備をさせたこと、児童が説明する機会をつくったことにより、意欲的に学習に取り組み、理解につながったと考える。



III おわりに

城田小学校での授業実践が終わってから、算数たよりを児童に配付した。文章を真剣に読んでいる児童や、「この問題は

いつまでにやってきたらいいですか。」という児童もいた。配付されたプリントはきちんと提出するという意識があるのだろう。これも小学校でのきめ細かい指導があってこそものだと感じた。

当初1時間に複数の課題や問題をさせることを考えていた。しかし、実際に児童の姿を目の当たりにし、指導計画を全て変えて授業を行った。実際に小学校で授業をすることで、中学生との大きなちがいに気付くことができた。いつもと違う先生が行う授業に、児童は戸惑っていた。中学校に入学したばかりの生徒も同じように、授業の進め方や生活環境に大きなギャップを感じるのだろう。

今回の実践は、1小1中だからこそ実現しやすかったのではないかと考える。課題としては、「小中の滑らかな接続」を充実していくことである。中学校教師としてできることは、子どもの成長段階に応じて授業づくりをしていくことだ。中学校1年生の4～5月には、話すスピードや授業形態などを小学校に近いものにし、中学校に慣れる時間を確保する必要がある。そのために、我々中学校教師が校区の小学校の授業を参観し、児童の姿を把握しておかなければならない。また、自分自身の授業力を高めていきたい。

研究を進めるにあたり、三重大学教育学部数学教育科の田中信明教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。改めて感謝申し上げます。また、授業実践を快く引き受けてくださり、多くのご指導をいただきました。城田小学校の先生方にも感謝いたします。本当にありがとうございました。

社会科副読本「わたしたちの伊勢市（平成30年度版）」刊行に際して



今年度も社会科副読本資料作成研究会において、小学校3、4年生を対象とした社会科副読本の改訂作業を進めていただきました。そして、このほど、平成30年度版が完成しました。

冊子が初めて発刊されたのは、昭和47年4月です。たくさんの教員の皆さんの協力を得て、改訂を繰り返し、内容を充実させてきた歴史のある冊子です。

第1回以降の会議には、全23校の教員の代表として8名のブロック代表の皆さんに出席していただきました。編集会議では、児童が地域学習により興味や関心をもてるよう、内容やレイアウトを吟味するとともに、表記や調査数値の更新、掲載写真の変更等について、熱心かつ丁寧に協議していただきました。

教育研究所だより13号でも紹介させていただいたように、長年に渡り、編集協力者を西 良孝先生（元御薊小学校長）にお願いし、学習指導要領の内容を踏まえ、適切なお助言をいただいております。

社会科副読本は、下記の全7章で構成されています。

- 1 わたしたちの伊勢市
- 2 伊勢市ではたらく人びと
- 3 人びとのくらしのうつりかわり
- 4 住みよいくらしをつくる
- 5 安全なくらしを守る
- 6 地いきのはってんにつくした人びと
- 7 わたしたちの住んでいる三重県

毎年度、各章の担当を決め、内容に応じて取材活動もしていただいております。その努力がこの1冊に結実しています。

今年度は、この社会科副読本を活用した実践研究を中島小学校の谷畑教諭にお願いし、「伊勢市ではたらく人びと」の「(4)工場ではたらく人びとの仕事 ③タイヤをつくる工場」を題材に授業を公開していただきました。来年度も社会科副読本を活用した授業実践研究について委託研究校を公募させていただく予定です。

平成29年3月に告示された学習指導要領「第2節 社会」には、第3学年から第6学年の共通目標として、「社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」と記されており、特に第3学年については下記の通り明記されています。

「(1) 身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(※(2)(3)略)

言うまでもなく、学習指導要領に記されている指導内容はスタンダードです。伊勢市の社会科副読本もこの内容を踏まえて、改訂を重ねてきました。平成32年度の小学校学習指導要領全面実施に向けての移行期間である今こそ、改めて読み込んでおく必要があると考えます。

4月上旬には冊子が印刷業者から直接配送されます。新3年生が興味をもって冊子を手にしてくれることを願っています。

社会科副読本資料作成研究会の会員として活動していただいた全ての皆さまに、心より感謝申し上げます。

◇編集後記◇

今年度も伊勢市教育研究所の様々な事業にご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。来年度はさらに方針を明らかにしながら、より皆さまに知っていただける伊勢市教育研究所を目指してまいります。

伊勢市教育研究所

〒516-0027 伊勢市桜木町 55-1
◆事務室 0596-22-7900
◆スマイルいせ 0596-22-7867
◆教育支援センターNEST 0596-22-7901
◆FAX（共通） 0596-22-7898

